

合唱団ホームページアドレス <http://www.wiengifu.org>

音楽とは 横への感性なり!

5

月号

2019年5月1日
編集・発行/
ウィーン岐阜合唱団

「水のいのち」よ 令和の空に のぼりゆけ!

岐阜本部 ソプラノ 新田ひとみ

「水のいのち」との初めての出会いは、第12回ウィーン岐阜合唱団定期演奏会でした。

令和なる輝く未来の幕開けに再びめぐり合い、演奏ができる興奮と幸せをかみしめています。10年前のプログラムには、作曲者高田三郎先生の奥様から、次のような熱い励ましのメッセージが寄せられていました。

「…中略「水のいのち」の歌詞は、人の魂の深奥にある真の願であり、夫は音楽によって更にその思いを増幅し、人生の究極の目的を、歌う者聴く者の心に深く訴えています。

1964年の初演以来今も広く歌われているのは、夫が作品を通して願ひ続けてきた望が、演奏によって生かされ、この世に花開き続けているもので、夫もどんなに喜んでいることでしょう。

平光先生と合唱団の皆様にご心からの感謝を捧げながら、ご盛会をお祈りしています。」と、結んでおられます。今読み返しても何ら色あせることはなく、言葉や音楽に込められた作者の思いが胸に迫ります。遙かな時は流れても、歴史が変わろうとも、未だ微動だにしない作品の存在感に圧倒されます。

練習が始まって3ヶ月余り。平光先生をはじめ、諸先生の熱のこもったご指導で、何とか全曲を通すことができました。しかし、究極はこれからの音楽作りです。まずは、全5曲からなる合唱組曲「水のいのち」を、もっと知りたい衝動に駆られます。

第1曲「雨」 全てのものにしとしとと落ちる雨を、静けさの中にも何かの始まりを暗示させるかのように、音楽が流れます。いかなる者にも、やさしく降り注ぐ慈愛の雨を感じます。

第2曲「水たまり」 降り注いだ雨が命を持ち、少しずつ

つ動き出す予兆のような美しさがあります。

水たまりの泥に人間社会の醜さを写し、青い空を写し出す。人の焦がれる気持ちの表れでしょうか。

第3曲「川」 逆巻く川の激流が、人間の生きる悲しみや憧れを代弁しているかのようです。

なぜ なぜ…と川に尋ねることは、本当は自分自身への問いなのでしょうか。

第4曲「海」 ゆらゆら揺れる波と、全てを受け入れる海の静かさ。繰り返される海からのメッセージも、やはり私たちへの詰問でしょうか。

第5曲「海よ」 海に戻った水のいのちが再び空に昇り、雨となり川となる。輪廻を繰り返す生の悲しみや喜びを表し、新たに生まれていく姿を称えて結ばれています。

《水のいのち》は水の魂であり、私たちの「いのち」心の姿そのものではないでしょうか。無常に流れる輪廻転生と、それに重なるドラマチックな曲の展開は、未熟な私の想像を遥かに超えます。歌詞や上辺の理解だけでは、到底太刀打ちできない恐怖さえ覚えるほどです。さながら反比例するかのように、とてつもない魅力に引き込まれていくのは、私だけでしょうか。

それを少しでも共感していただけるのなら、皆さん是非5月の合宿に参加しませんか!

もちろん何をおいても、熱情的で密度の濃い平光先生や和子先生のご指導は、普段の練習では得られないものが凝縮しています。空を写し清流を湛える長良川と、焦がれる山に抱かれた宿泊の地郡上。まさに「水のいのち」を育むにふさわしいすばらしい環境です。夏の演奏会の成功に向かって、気持ちもハーモニーも揃えて臨んでいきたいと思えます。多くの方の合宿参加をお待ちしています、宜しく願いいたします。

“水のいのち”

今、わたくし達が歌っている「水のいのち」についての素敵な文章に出会いました。一緒に歌う皆さんにお知らせしたくて筆を執りました。

この文章の作者は、上高地を訪れ眼前に聳え立つアルプスの清流の梓川、こんなに澄んだ水の流れはまず無い。散歩道のどこにでもついて回って、清らかさにも寂しさを秘めた歌を歌っている、と梓川を喜び、「水のいのち」に想いを馳せています。(上高地は、わたくし達の合唱団が毎年秋の紅葉ツアーで行く所です)

【水のいのち】は、指揮者泣かせの難曲である。……(平光先生は、泣いてはいません)

私達のウィーン岐阜合唱団は大丈夫です、易しいのは〈川〉ぐらいで、他の4曲は造型上に大きな問題を含んでおり、なかなか一筋縄ではゆかない。つまり、造型を完全に自分のものにしない限り、どれほど心を込めて歌っても、聞く人に強く訴えることは不可能だし、いわんや響きの美しさだけを追い、詩の内容に深く喰いこんで行かないような演奏では、とうてい感銘をあたえることは出来ない。

梓川の清流に、ぼくは 5 曲からなる〈水のいのち〉を想う。

第1曲目の〈雨〉は、万物にしとしとと降り注ぐ雨を静かに表現し、第2曲目の〈水たまり〉は、スケルツォ風のリズムミクな音楽に変わる。そして、第3曲目の〈川〉では、渦巻く激流が歌われるが、そ

の旋律は〈水のいのち〉全曲中で最も美しいものの一つである。第4曲目の〈海〉は、全てを受け入れる海の描写となり、終曲の〈海よ〉では、水のいのちが再び空に上って行き、雨となり、川となって輪廻を繰り返すことが暗示される。

この組曲を歌い、また聴く者は、何より高野喜久雄による詩のスケールの大きさに打たれてしまう。いまだかつて、音楽において大自然の輪廻が、かくまでも素晴らしく捉えられた作品は決してあるまい。

2曲目の〈水たまり〉は、それまで平静に雨と水の竹まいを歌ってきた音楽が、突如として怯えるように人間の存在に目を向ける。そして、〈川〉で、【水のいのち】は濁流に押し流される。人間の運命に思いを致す。印象的な終結である。私は、【水のいのち】の核心は、4曲目の〈海〉の中間部以降にあると思う。(2009年団誌 2月号より抜粋 作者不詳)

水のいのち 作曲者 高田三郎 プロフィール

1913(大正2年)12月18日、名古屋に生まれる。聴講科の指揮部に学び、信時潔、細川碧、片山頼太郎、プリングスハイム、フェルマー、グルリット、ローゼンシュトック、クロイツァー、福井直俊等らに師事。研究科の頃から日本の旋律をテーマとした作品をその創作の基本と定め、その最初の成果が研究科の終了作として1941年に作曲された「山形民謡によるバラード」である。1948年に平尾貴四男、安部幸明、貴島清彦等らと作曲グループ「地人会」を結成し共同で作品発表を行う。1954年弦楽四重奏のための「マリオネット」を境に、高田の創作の中心は声楽作品へと移って行く。日本語の美しさを基調とし、誠実な人柄が滲み出る高田の合唱作品は多くの共感と支持を得、その後「水のいのち」や「心の四季」など、全国の合唱団のレパートリーに欠かせない傑作が数々生まれたことは、万人の知るところである。

●エピソード

(かつて高田氏に国立音大で指揮を受けた、という人から伺ったものです)

- ※ 国立音大で、和声の授業の最中に教室がダレ気味になったことを察して、「もう、今日の授業は止め、皆で野球をしよう!」と、真っ先にグラウンドに駆け出す高田氏。喜色満面で後を追う学生たち、その高田氏のクラブ捌きの上手かったこと
- ※ 同じく、国立音大での実技試験でのこと。うまく演奏できず、今にも泣きそうな学生に向かって「今までの演奏はナシだ。今から試験が始まったと思って、もう一度最初からやっごらん」現在、私が生徒に教える時、かつて先生から頂いたこのお言葉を、そのまま使わせてもらっています。

“歌うことの楽しさ”

大垣支部 ソプラノ 太田 敦子

「第九を歌いたい！」昨年の秋、無性に「第九」が歌いたくなかった。

そもそも高校時代、合唱経験0だった私に、姉が「第九」を歌うことを薦めてくれたのがきっかけで、オーケストラと共に歌う喜びを覚え、ベートーヴェンに強く魅了された。それから数年は年末に「第九」を歌っていましたが、就職してから30年あまり家事と育児と仕事の忙しさで「第九」を歌う機会がなく、もう歌うことを諦めていた。そんな折り、一昨年の夏、中学生の末息子が出場する合唱コンクールを聴きに行く機会があり、学生や高校生の魂の歌声を聴いているうちに心も体も浄化されていき、涙が止まらなくなかった。昨年の秋、わくわくしてウィーン岐阜合唱団の扉をたたいた。

30年あまりのブランクがあり、しかも「第九」しか歌った経験がない私を団員の皆さんに温かく迎えていただき、平光先生、伴先生、ピアノ伴奏の諸先生等からのご指導、多様な表現の仕方等、楽しさを多く体験した。そんなことで、毎回の練習がとても楽しく、練習中の平光先生と団員のやり取りがまた、楽しい。今年、初めて「水のいのち」を練習した時、旋律と和音と歌詞の美しさに衝撃を受け「水のいのち」に出会えたことに感謝！初めてのことばかりの私ですが、これからもどうぞよろしくご指導お願いします。

「音楽とは横への感性なり！」岐阜アルト 山田秀子

思い返すと、ひょんなことがきっかけでしたが、ウィーン岐阜合唱団にはいってから、かれこれ9年が過ぎようとしています。飽き性な私がこれほど長く続けてこられたのは、平光先生をはじめ、伴先生、諸先生方々の熱く親切なご指導のおかげだと思っています。

入団第一日目の練習の中で、平光先生がみんなにおっしゃっていた言葉は、今も忘れてはいません。

『練習でただ歌っていてもだめです、「あっ！そういうことか！」と自分の腑に落ちないと、うまくならない』と。

先生が目指すところに到達するために、何度も何度も同じところを繰り返す毎回の練習は、時には「またア～?!」と思ってしまうのは、まだ自分のなかで腑に落ちていないところなのかもしれません。

さて、合唱団新聞の存在も、私が練習熱になれる理由のひとつです。毎回、団員の方が書新しく入られた方に、「今度、原稿を書いていた

だけないでしょうか？」と、ついお願いしてしまふのは、その人をもっと知りたいという気持ちだからなのです。

なんと、今年の11月には、240号が発行されます。20年もの間、合唱団新聞が存続しているのは、関わってこられたスタッフの皆さんのご努力のたまものです。

また、新聞のタイトルでもある「音楽とは横への感性なり！」このタイトルも気に入っています。耳を澄ませて人の声を聴きながら、自分の声を合わせることは、人に関心を持ち、人に寄り添うことだと思うのです。そうやって生まれるハモリは、聴く人にとって息をつかせるほどの美しいものとなる。

「あっ、わかった。そういうことか！」と納得できる喜びをたくさん作っていきたいと思います。そして、音楽から広がる世界をみなさんと作っていきたいと思います

5～7 月練習予定

練習時間は 18:45～20:45 です(18:30 までに集合しましょう)

月 日	岐 阜	月 日	大 垣
5月 9日 (木)	岐阜・大垣合同練習 長森コミュニティセンター 18:45～20:45		
5月16日 (木)	長森コミュニティセンター	5月17日 (金)	大垣市南地区センター
5月23日 (木)	岐阜・大垣合同練習 長森コミュニティセンター 18:45～20:45		
5月30日 (木)	長森コミュニティセンター	5月31日 (金)	大垣市南地区センター
6月 6日 (木)	長森コミュニティセンター	6月 7日 (金)	大垣市南地区センター
6月13日 (木)	長森コミュニティセンター	6月14日 (金)	大垣市南地区センター
6月20日 (木)	長森コミュニティセンター	6月21日 (金)	大垣市南地区センター
6月27日 (木)	長森コミュニティセンター	6月28日 (金)	大垣市南地区センター
7月 4日 (木)	長森コミュニティセンター	7月 5日 (金)	大垣市南地区センター
7月11日 (木)	長森コミュニティセンター	7月12日 (金)	大垣市南地区センター
7月15日 (祭)	岐阜・大垣強化練習 長森コミュニティセンター14:00～17:00		
7月18日 (木)	長森コミュニティセンター	7月19日 (金)	大垣市南地区センター
7月21日 (日)	岐阜・大垣強化練習 長森コミュニティセンター14:00～17:00		
7月25日 (木)	大垣市北地区センター(予定) 18:30～20:00 (オケ合わせ)		
7月27日 (土)	岐阜・大垣強化練習 長森コミュニティセンター14:00～17:00(最終確認)		
7月28日 (日)	ウィーン岐阜合唱団 定期演奏会本番於:岐阜市民会館 大ホール 14:00 開演		

音楽家の名言 2<vol-5>

ピアノの鍵盤を叩いたら音が鳴った。まず、そのことが面白いと思ったわけです。その音が2個になって3個になって、やがてメロディーが作られて、さらに音が重なって、音の面白さにどんどんはまっていった。……佐渡 裕

指揮者。バーンスタイン、小澤征爾らに師事。クラシック音楽の枠に留まらない音楽の啓蒙に努めている。

佐渡 裕にとっての“絶対”の存在

佐渡 裕のお母さんはピアノの先生でした。家に2台のピアノがあったので、自然とふれあうようになったのが、佐渡と音楽の最初の出会いです。面白さにつられてピアノを習い始めますが、小学生時代、毎日のレッスンは苦痛だったそうです。しかし、そのおかげでメロディーを聴き取る能力が身に付き、色々な曲を縦笛で即興的に演奏して、クラスの人気者になったそうです。

そんな佐渡ですが、レッスンを毎日やらなければならない義務感や親に対する反抗心が重なって中学時代はロック少年になりました。ところがある日、ストラヴィンスキーの「春の祭典」を聴いた時にものすごい衝撃を受け、再びクラシックにもどってきます。クラシックの中には、ロックやジャズ、ポップスの面白さもあることに気が付きます。佐渡にとって恩師バーンスタインは忘れない存在ですが、一番大きな影響を与えてくれたのは両親、特に母親です。「人を喜ばせること、気持ちを大切にすること、ワクワクさせること」を教えてくれた母親は、佐渡にとって、唯一無二にして、日本国憲法とは関係ないところに生きている“絶対”の存在であり、この教えをずっと忠実に守っているそうです。

編集部よりお願い

広く原稿のご投稿を募集しています。

内容はご自分のPRでもOK!です。この新聞は団員相互の親睦・融和を図るものです。奮ってご協力ください。

(担当;坪内まで)

ご投稿窓口:電話 058-231-4700 FAX058-231-4721 e-mail:printshiraki@yahoo.co.jp(担当 白木)